

やんさノエ

会報

2008 No.9



発行 江差追分会

2008.4.14

北海道松山郡江差町中歌町193-3

TEL 0139-52-5555

FAX 0139-52-5544

ホームページアドレス <http://www.hakodate.or.jp/oiwake/>

特集 次世代に引き継ぐ追分節



追分は世代を超えた交流の場

昨年の第四十五回記念江差追分全国大会。

アトラクションは子どもが主役の「次世代に引継ぐ江差追分」でした。本番における子どもたちの熱唱は多くの観衆に感動・感激を与え涙を流す姿が数多く見られました。

それは正に追分の後継者育成に相応しいものでした。こうした盛り上がり子ども追分に対する思い入れ、そして観衆の感動の場を一度きりで終わらせるべきでない、との思いから追分会館が初めて開催したのが「子どもとヤングの江差追分発表会」でした。

町内の保育園児らによる合唱・ソーラン節や追分踊り、昨年の少年全国大会優勝者の追分、三丁四才児による追分独唱、兄弟姉妹による追分の掛け合い等々。伴奏・合いの手もほとんどが子どもが主役。

そのステージは、全国大会のアトラクションに負けない程の盛り上がりを見せてくれました。子どもが主役となれば、出場する子どもたちの両親はもとより、じいちゃん・ばあちゃん・兄弟も駆けつけ大きな声援を送ると共に、そこには世代を超えた交流の場が出来ていました。声援を送りながら、わが子、わが孫、わが兄弟の熱唱に感極まり、ハンカチで目頭を押さえる姿があちこちで見受けられました。

何よりも追分の後継者育成の目的は充分果たされたと同時に、三丁四世代に亘る交流の場であった素晴らしい事業でした。この事業は、江差追分の後継者育成の目的を多くの大人達にも理解して貰った事業であったと同時に、世代を超えた交流の場になったことも間違いありません。

この輪が、追分を愛好する全国の地域に拡大し、多くの子どもが江差追分を歌い継いでくれることを心から願っています。

第四十五回江差追分全国大会

―次世代へ引き継ぐ追分節―

一般優勝 間島秀格さん 熟年 橋本孝志さん 少年 福田光さん

第四十五回節目の江差追分全国大会は「次世代に引継ぐ追分節」をテーマに後継者育成を目標に九月二十一日から三日間、江差町文化会館でくり展げられた。追分日本一の一般優勝者は間島秀格さん(長沼町)、熟年は橋本孝志さん(札幌)、少年は福田光さん(厚沢部町)が優勝を飾った。節目のアトラクションでは地元江差の少年少女九十一名による大合唱が純心な唄声で観衆の感動を呼んだ。「江差追分日本一」を決める全国大会一般の決選では若い女性の入賞が続いて

いる。最近十年間の優勝者のうち七人が二十代の女性だから圧倒的である。第四十四回大会も優勝から四位まで女性が占め、男性は五位の入賞に終わっている。

追分は男性の方が本来の味わいを出せるはずだが、若い女性の声に押されている。

第四十三回大会では十年振りに播磨孝雄さん(函館)が優勝。播磨さんは六十歳の最高齢で追分の真価は年齢にかかわらずないことを示してくれた。この年は上位三人を男性が独占して気焔

一般の部入賞者

- 準優勝 安澤 望 和春会支部
- 三位 福土優子 千歳支部
- 四位 瀧本豊壽 深川支部
- 五位 山本康子 鷗声会支部



を上げた。

四十五回大会の優勝の行方は、男性陣の味わいか女性陣の若い力か注目を集めていたが、長年上位入賞で

―次世代へ引継ぐ追分節―

感動をよぶ少年少女 九十一名の大合唱

第四十五回大会節目の特別出演は、九月二十二日の予選後と二十三日決選終了後の二回に上演された。

司会は江差高校一年岸田茉美さんが担当、新鮮な雰囲気子どもたちの演出を引き立てた。

少年少女による大合唱は地元江差支部所属の子どもたちと小中学生の参加を募った総数九十一名の出演となった。子どもたちの純心一途の唄声は、巧拙を超えて惹きつけるものがある。最年少は三歳児から中学まで、九十一名の並ぶ舞台は緞帳がある観衆のどよめきで感動が会場を圧した。

また江差高校では、単位制選択科目で地域文化の江差追分を取入れており、大会では選択科目を受講した三年生四人の追分が発表された。高校授業で江差追分に取組むことは、後継者育成の面からも極めて望ましい。



- 六位 間島正晴 札幌白石支部
- 七位 山本ひとみ 十勝大雪支部
- 八位 川俣明彦 菊水会支部
- 九位 村川真奈美 苫小牧観昇会支部
- 十位 黒森このみ 札幌南支部



あと二歩。もうすぐそこが、遠かった。
 松山管内江差町で二十三日、開かれた江差追分の第四十五回全国大会。優勝者に自分の名が呼ばれた瞬間、涙をこらえることはできなかった。
 昨年までの大会で八年連続で、五位以内の上位に入賞した。このうち二度は準優勝。舞台上に上がるたびに自然と「優勝候補」の看板がついて回った。そんな重圧に「追分をやめようと思ったこともある。苦しかったですわ」。優勝旗を手に、静かに喜びをかみしめた。

自分の歌探しへ一歩

この一年はほとんど練習できなかった。空知管内長沼町で農業を営み、農業の使用を抑えた安心安全のコメ作りにこだわっている。札幌などの消費者まで自分で足を運んで届けており、忙しさは増すばかり。九月に入って集中的にけいこを重ね、なんとか声を整えた。

それが逆に、ステージ上で自分の気持ちをふっと染にさせた。気負わずに歌い上げた追分は、かつて北前船で蝦夷地を目指した人たちの喜びや悲しみ、寂しさなどの情感を見事に表現。詰めかけた聴衆をうならせた。

民謡を歌う父の影響で中学生のときに始めた追分。目指してきた頂点を一度極めると、全国大会はもう出場できない。大会での優勝が終わりだとは思っていない。これからは自分が理想とする追分を追い求めていく。
 安堵の笑顔の中に、日本一の歌い手としての誇りがうかがえた。出身地の長沼町で父と二人暮らし。三十二歳。

(細川伸哉)

北海道新聞 H19.9.25

第十一回熟年全国大会入賞



- 優勝 橋本孝志―札幌豊平支部
- 準優勝 奈良たか子―帯広支部
- 三位 松谷敏江―白老白声会支部
- 四位 藤本 哲―声友会支部
- 五位 鈴木金市―秋田中央会支部
- 六位 本田勝三―函館澄声会支部
- 七位 舟山マリ―札幌西支部
- 八位 高橋亮子―鷗声会支部
- 九位 森井洋祐―苫小牧支部
- 十位 佐藤梁治―函館支部

第十一回少年全国大会入賞

- 優勝 福田 光―厚沢部美和支部
- 準優勝 藤谷優美―秋田王藤会支部
- 三位 須藤 栞―千歳支部



- 四位 田村ひより―かもめ会支部
 - 五位 三谷 葵―札幌南支部
 - 六位 西嶋吉継―かもめ会支部
 - 七位 沢 晴奈―苫小牧銀星会支部
 - 八位 小笠原果実―水堀愛好会支部
 - 九位 林 愛葉―かもめ会支部
 - 十位 川畑菜波―和春会支部
- 審査員奨励賞

- 田村つくし―かもめ会支部
- 宮本真理奈―安平清志会支部
- 中島弥生―かもめ会支部
- 黒森ひかる―札幌南支部
- 大木風香―札幌白石支部

秋田・青森南部少年少女の二組

地元の優勝・準優勝を飾った唄と踊り

―次世代の追分節にはずみ―

「次世代へ引継ぐ追分節」記念特別アトラクションは、大会三日目の九月二十三日に秋田県江差追分支部「王藤会」と、青森県南部地方民謡「さわらび会」二組の少年少女グループが出演しました。

秋田も南部地方も民謡の宝庫といわれ、子どもたちも地元の民謡に取り組んでいます。今回江差追分のグルー



プと交流することによって、後継者育成活動にはずみをつけようと企画されました。

まず秋田追分（藤谷優美・中三）本荘追分（金子未希・高一）、南部追分（大久保咲・中三）と江差追分とかわりのある三つの追分が上演されました。今回出演されたのはいづれも地元の唄で優勝、準優勝している小・中高校生の実力者たちです。

秋田も本荘も江戸時代から北前船の寄港でニシン漁に出稼ぎに来ていた人たちも多く、それぞれの土地で歌われてきたもので江差追分とよく似たところもありました。また青森の南部地方でも追分が歌われていたもので、三味線と太鼓伴奏というのがこの唄の特徴です。

続いて秋田の代表民謡「秋田おばこ・目黒優月・小二」と青森県八戸あたりの奥南部に伝わる「南部荷方節・大久保千春・小五」が披露されました。本荘追分、南部追分、秋田おばこには踊りがついて、子どもたちの鮮やかな手振と身振りが見事なもので人気を呼びました。

記念アトラクション余話

小中学生ら九十一名の大合唱実現

第四十五回大会の記念アトラクションは、「後継者育成」をテーマに、歌い手としては、未知数な小・中、高校生の唄をどう演出するかが課題だった。

学芸部門担当の岩淵啓介理事から、「子供は、舞台に立つだけで感動を呼ぶ。子供らしい服装で着飾るようなことはしない方がいい」と提案があった。

同部門担当の高田裕理事は、「子供たちの唄でも踊りでも出演の心がけ、舞台の礼儀を指導することが基本だ」と提言している。高田さんは、特に東北民謡をライフワークとして研究を重ねて精通している。秋田、青森の子供グループを招聘することとしていたので、演出は高田さんが担当ということになった。

アトラクションは、司会から全部子供たちで構成演出しようという舞台演出からシナリオの作成まで高田さんの手にかかった。司会者は誰でもできるものではない。小田島事務局長が知り合いの娘で高校一年生の岸田菜実さんを説得して起用。子供の追分

は「合唱以外にない」ということになったが、支部所属だけの人数二十数名では到底足りず「大合唱」なんてならない。

そこで、小中学校に対して、町教委が主催している「江差追分の授業」があり、各学校へ「追分は江差の町の文化だから、大会でのアトラクションへの参加を呼びかけてほしい」と事務局が町教委と連携して趣旨説明し参加要請。その結果、一校約三十名の生徒の参加が決定し、大合唱の誕生となる。

いよいよ本番。司会者の菜実ちゃんのセーラー服が初々しい。司会の出来も上々。緞帳があがると、前列に五歳のちびっ子から中学生まで約九十一名が勢ぞろい。

「かもめ」とともに会場からは、「おおっ」というどよめきにも似た歓声が沸き起こる。全員が身軽な普段着で着飾っているものはいない。

子供たちは子供たちなりの真剣な歌い振りで感動を呼んだ。子供たちが、次世代追分文化をどう受け継ぐのか。それを考えさせる舞台であった。

特別記念アトラクション

輝く宝珠・歴史にのこる子供追分：高田 裕

第四十五回江差追分全国大会は、例年どおり緩やかな起伏の旋律によせて、卓越した技量で精緻に歌われてゆく大会であった。



だが、四十五回大会の節目であり、少子高齢化が進むなかで後継者育成を考えながら、各地方の追分も聞いてみようという特別記念アトラクションを企画してみた。「次世代に引き継ぐ追分節」をテーマに歌・踊り・司会すべてが子供たちによるもの。

それぞれの大会の子供部門で活躍した秋田追分、本荘追分、南部追分などは変幻多彩なイリュージョンとなつて追分の生命を披露した。

また、地元で学ぶ子供たちの各種の追分は圧巻であり、観客に多くの感動を与えた。三歳から中学生までの九一名による江差追分大合唱は、天使の声となつて響き、四人の高校生による真摯な姿に感動した。特に、三歳・四歳のチビッコ三名が瞳を輝かせながら、かもめエの呱呱の歌声に、感涙する人も多かった。

そして、一本通しの子供による追分踊りは、はんなりと麗しがあつて羨のよさを実感。これらは、いづれも郷土の誇りであり、歴史にのこる宝珠であった。

(学芸部門理事)

感動を呼ぶ

子どもらしさ演出

歌い手としては未知数な小・中、高校生たち。唄をどう演出するか、三歳のチビッコから高校生まで、九十一人の大合唱に会場が沸いた。

司会の高校一年・岸田実さんは、二日間のシナリオを暗記する(そらんじる「暗記する」ほど練習してアトラクションを盛り上げた。



江差追分踊り「Hamanasu会」チビッコから小学生まで、日常の練習を積み、見事に上演。



江差高校単位制選択科目。「江差追分」を受講、地域文化に取り組んで成果を発表する四人の高校生。江差を誇れるだろう。



尺八伴奏も大人を頼らず、年長の子どもが見事に吹奏した。

「子どもは舞台上に立つただけで感動を呼ぶ、子どもらしい演出で」と岩淵理事の提言。三才の追分 高橋 航くん



青坂満師受賞祝賀会



日本民謡協会「民謡名人位」
地域文化功労者文部科学大臣賞

青坂満師の受賞祝賀会

日本一の唄と尺八 八十四人の大合唱

江差追分界の第一人者といわれている青坂満上席師匠が平成十九年、日本民謡協会「民謡名人位」と文化庁の地域文化功労者、文部科学大臣賞の二つを受賞された。いずれもわが国民謡界における最高位の受賞である。

この受賞祝賀会が道内各界を代表する人々によって一月二十日札幌グランドホテルで開かれた。

祝宴では、江差追分全国大会の歴代優勝者二十二人と尺八奏者六十二人による江差追分の大合唱を披露し、青坂師の功績を讃えた。これだけの大合唱は全く初の試みであったが、名実共に追分のスケールの壮大さが感動を呼んだ。

青坂さんは幼いころから追分節に親しみ、三十一歳で日本一を手にして以来、漁師家業のなかで生涯を追分節に打ち込んで、「潮の匂う青坂節」といわれる唄を身につけた。現在追分会副会長をつとめ師匠会会長として後進の指導に励んでいる。



高橋はるみ北海道知事からお祝いの握手

祝賀会には、高橋はるみ知事や道内各界、追分会関係者ら三百余人が出席。合唱では紋付袴姿の出演者がびっしり並び日本一の唄声を響かせた。

青坂さんは最初に独唱で追分を披露し、「追い求めてきた追分の『味わい』は天空のはるかかなたにあり、命ある限りが修業だ」と謝辞を述べた。



支部・協議会だより

秋田中央会支部 結成二十周年記念発表会を開催

満員の観客を魅了

昨年十二月二十三日秋田中央会支部（佐々木東雲支部長）では、秋田

市文化会館小ホールで、結成二十周年記念発表会を開催した。

発表会は、三部構成からなり、第一部は会員による江差追分とし、本唄や掛け合いを入れるなどの趣向で発表。第二部は、秋田県内の人気民謡や津軽よさねなど会員の得意曲がそれぞれ披露された。

第三部は、江差追分師匠の資格を持つ、嵯峨幸男会員と江差から招いた菊地勲師匠が江差追分の真髓を披露。約四百人近い満員の観客は、江差追分に聞き惚れ魅了され、中には涙する女性もいた。

秋田民謡のコーナーでは、歌い手と観客が一体となって、唄を楽しんでいた。

このように発表会は盛会裡に終了することができ、会員一同感激を新たに、これからも熱心に江差追分へ取り組むことを誓い合った。

四部門全部に優勝旗揃う

第四回発表大会 三月十六日(日)

江差追分渡島協議会（会長 市戸脩）の、平成十九年度総会が十二月九日に函館市の昭和町会館において、会員及び役員約三十名が出席して開催された。

市戸会長は、あいさつの中で「会員皆様のお陰で、第三回発表大会を

終えました。今後も皆様方の絶大なご協力をお願いします」と協力を要請した。引き続き、議案の審議に入り、平成十八年度事業経過報告、収支決算報告及び監査報告が承認され、続く平成十九年度事業計画案では、第四回発表大会を平成二十年三月十六日に市民会館で開催することを決定。一般二部の優勝旗も新調することも含めて承認された。これで四部門の優勝旗が全部揃うことになった。

会員からの質問では、「高齢化している現状を重視し、会員全員が参加できる催しをお願いしたい」との意見が出され、今後前向きに検討していくことにした。

佐藤隆広副会長の閉会のことばで締めくくった。

今回より支部及び地区運営協議会コーナーを設けました。ニュースがありますしたら、事務局までお寄せ下さい。お待ちしております。



第二十三回江差追分セミナー

札幌の田中君枝さん、東京の松木秀一さんに感謝状



今年で二十三回目を数える追分セミナーには、遠くは沖縄県をはじめ、福岡県、兵庫県、静岡県等全国各地から一二十名の方々が風雪強い江差の二月に参加されました。

この中には、八十歳を超えても今なお追分に情熱を燃やしはるばる福岡県から来られた船津さん。船津さんの年齢をきずかつて娘さんが一緒に同行して、期間中一緒に勉強されました。

また昨年の全国大会に初めて追分を聴き、感動して今回ご夫婦で初め



て参加された兵庫県西宮市の西田昭しづご夫婦。二週連続して参加した静岡県富士市の藤木清三郎さん等があり、また新たな出会いが誕生しました。

今回二十三回目ですが、今年で二十回参加したという方がお二人おりました。

札幌白石支部の田中君枝さん。東京成鷗会支部の松木秀一さんです。お二人には、濱谷一治会長より感謝状、青坂満上席師匠から直筆の色紙を贈呈しました。



本唄 Main song (Hon-uta)

かもめの 鳴く音に
I suddenly wake up to the cry of the seagulls
ふと目を さまし
and wonder if those
あれが 蝦夷地の 山かいな
are the mountains of Ezochi I can see

後唄 Final song (Ato-uta)

沖でかもめの 鳴く声 きけばネ
Hearing the cry of seagulls offshore
船乗り稼業は やめられぬ
I cannot quit living sailing of fishing

ESASHI OIWAKE の英語解説版作成

江差追分では、来る7月開催の北海道洞爺湖サミット及び江差追分会館への外国人の来館者増加にともない、江差追分の普及宣伝用英語解説版を作成しました。

内容は、追分の歴史変遷、前唄、本唄、後唄を英文で解説してあります。ご希望の支部は、事務局までお知らせ下さい。(無料)

作成協力=小樽商科大学 高井收教授

事務局より

四月一日付けでの江差町の人事異動に伴い、事務局でも次の二人の職員が異動となりました。在職中は何かと皆様にはお世話になり、有難うございました。

新しい二人もよろしくお願ひします。

前任 事務局次長 中川 智

(町教育委員会総務係長へ)

事務局書記 三宮 弘之
(財務課納税係へ)

後任 事務局次長 西海谷 靖

(町教育委員会総務係長から)

事務局書記 中村 博之

(町民福祉課戸籍住民係から)

【編集】 岩淵啓介・松村 隆

館 和夫・高田 裕

【企画】 江差追分会事務局